書評・紹介

中嶋隆蔵編『出三蔵記集　序巻訳注』

織田顕祐

インドに興った仏教が、中国に受容され定着するに至るまでには、二重の意味での想像を絶するような困難があったに違いない。何故なら、中国人にとって仏教はなんといっても外来思想であり、加えて受け入れる側の中国人は一般に諸子百家といわれように高度な精神文化を既に持っていたからである。そのような困難を乗り越えることができたのは、身命をかえりみないインド西域の渡来僧の護法精神と中国人の篤い求道心によってである。両者の接点は、仏典の中国語訳という形で実を結び、翻訳された仏典によって中国人の仏教理解は進んでいったのである。ところが、インドや西域においては仏教教理は相当の時間をかけながら必然的な理由によって展開したのであるが、渡来僧はその中のある一面をたまたま伝えることができただけだった。従って中国人は渡来僧を通して様々に展開した仏教を無秩序に受け入れざるを得ないことになったのである。しかしこのような事情は、結果的に中国仏教を非常に特徴あるものとすることになったのである。無秩序に紹介される仏典を内容的に整理しようという要求は、必然的に経典研究をうながし、内容の異なるさまざまな仏典を体系的に把握しようという要求を生み、それは、教相判釈という中国仏教独自の思想を実現したのである。そうした、仏教を全体的に把握しようとする試みは、最終的には軸になる経典を発見して「宗」とよばれる考え方を生み出していくのである。このような特徴ある中国仏教の最初期の様子を知るための資料として重要なものが『出三蔵記集』である。

『出三蔵記集』は、中国南朝の梁の僧祐によって編集された現存する最も古い経録であり、後漢から梁代までに翻訳された三蔵（経・律・論）の目録である。全体は、経録を作る理由（撰縁記）、訳者別の経名録（銓名録）、経典の序文集（総経序）、翻訳三蔵の伝記集（述列伝）、の四部で構成され一五巻の分量がある。これらはいずれも当時の中国仏教あるいは西域の仏教事情などを知るための有力な資料である。この中でも経序は特に中国人の仏教理解を知るための重要な手がかりであるということができる。これらの文章の多くは、中国の仏教者がさまざまな困難の中から仏教を理解し、その理解を中国の古典を存分にふまえた極めて格調高い表現によって著したものであるという点で、読解しにくいことこのうえないといったものばかりである。筆者はかつて大学院の文献研究で、これらの一部を横超慧日先生にご指導いただいたことがあるが、筆舌につくしがたい経験であったことを記憶している。『出三蔵記集』の経序は、このような性格を持つ文献であるので、これまでにも少

なからぬ碩学によってこの中の一部について解説が加えられたり、現代語訳が試みられたりしてきたが、今回東北大学の中嶋隆蔵博士によって全文の訳注が公刊された。画期的なことであると思われるので浅学を顧みずに内容を紹介したい。

冒頭の序によれば本書は、一九九八年初秋から一九九〇年十二月にかけて行われた、編者を中心とした数名のメンバーによる輪読会の結果を整理してでき上がったもののようである。『出三蔵記集』巻第六から巻第十一までに収められるすべての序文・跋文・後記などについて、現代語訳と訳注を施したもので、内容は本文・校勘・語注・巻末の人名書名索引からなる。本文は上下二段からなり、原則として大正蔵経を原文の底本に用い、これに対して高麗蔵経・磧砂蔵経・嘉興蔵経・東大東洋文化研究所所蔵江戸期刊本による校勘とを合わせて紙面の上半に掲げ、この本文についての現代語訳を下半に記している。なお本文は白文に句点のみを付しただけであり、読点・返り点・送りがななどは施されていない。語注は、注釈というよりも各語の出典を明示したものと言うべきであり、とくに中国の古典についての調査が精力的に為されており、裨益するところが大きい。この語注に引用される漢文にも返り点・送りがななどは施されていない。巻末の書名人名索引は、本文中の当該語を首字の画数ごとに五十音順に配列したものである。

以上が本書の梗概である。難解な『出三蔵記集』の経序が、現代日本語によって通して読めるようになった利点は計り知れない。今改めて全体を通して読んで感ずることは、初期の中国仏教者達がどのような点に苦労していたかが手に取るように分かる点である。これらの困難は一旦解消されると後から気がつくことのできないような質を持った問題であると言えるが、当時の仏教者には根本的な問題であったのである。

第一に経序の終始を一貫する問題は、一般に「文質論議」といわれる問題である。これはなんといってもインド・西域と中国の文化の違いに起因する経典翻訳上の問題であったと言うべきであるが、巻第七の「合首楞厳経記」（支敏度、本書五七ページ以下）、巻第八の「摩訶鉢羅若波羅蜜経抄序」（道安、本書八七ページ以下）、巻第十の「大智論抄序」（慧遠、本書二九七ページ以下）等の所説によってその内容を知ることができる。つまり、インドや西域の文章は修飾があっても決して過度にならず、表現は簡潔であることを第一としている（質）。これに対して中国では古典に背景を持つ格調高い言葉で文章をつづることが第一であり、結果として良い文章は文飾を用いることになる（文）。このような文化の違いをどのように中国文で表現するのかという問題が、文質論議の実質である。事実、現在ではサンスクリット語から現代語訳された経典を読むことができるが、前の文章をそっくりそのままくり返しながら話題が進んでいく構造に多少やり切れないものを感じるときがあることは否めないのではなかろうか。「質」を第一とする立場からは「文」は冗漫に感じ、「文」を第一とする立場からは「質」は野暮に写るであろう。このような議論の指標として示されたの

が、「摩訶鉢羅若波羅蜜経抄序」に説かれる有名な「五失本三不易」なのであった。このうち「三不易」の主張は、本文を読む限り、ダルマとしての「法」は不変であり、それは人知をはるかに越えたものであるから自己の関心によってかえてはならない、という意味であると思われる。従って「三不易（さんふえき）」と読んで「易えてはならない」と読むべきであると思われるが、注で「容易ではないとするのも捨てがたい」（九十ページ）とするのは一体どのような根拠によるのであろうか、首肯できないところである。

第二に現在では全く気付くことのできない点であるが、当時の人々にとっては、経典の同定すら課題であったということを知ることができる。この点は例えば、「菩薩善戒菩薩持地二経記」（僧祐、本書一七九ページ以下）の記述等によって知ることができる。同一経典の翻訳であっても、訳語が不統一であったり、経典の一部が未翻訳であったりして同じ経典であることが分からなかったのである。元の経典がどこで成立し、どのような状況の中で伝えられてきたかを知るためには重要な情報であり、経典目録を編纂しなければならなかった事情の一端を伺い知ることができる。

第三に大乗・小乗と言った用語を盛んに見ることができるが、これらに対して当時の人々は厳密な区別を持っていなかったという事実を知ることができる。巻第九「廬山出修行方便禅経統序」（慧遠、本書二〇四ページ以下）の所説などによれば、如来の教えは無数の方便を通してはたらくものであるから小乗と大乗の区別もどうして定めることができようか、と言った仏教観を持っていたことを知ることができる。この点は後の時代になって声聞蔵・菩薩蔵という概念が明確になることによって解決するのであり、この時代は用語のみ有って内実の未だ伴わない状況であったと言える。また、巻第十「毘婆沙経序」（道挺、本書二八三ページ以下）には「漢土では大乗の教えはすでに備わり奥深い宗はほぼゆきわたった。まだよく練られていないのは三蔵九部だけだ」（二八四ページ）と言った記述があり、どのような理由によってアビダルマの伝来が遅れたのかということを吟味することでインド・西域における大乗小乗の成立に関する示唆を得ることができるかもしれない。

以上の諸点は、本書によって経序を通読したことから筆者が思いつく中国仏教成立に関する要点であるが、読者の関心によって様々な問題が本書の中から見出されるに違いない。このように本書は、読む人の利用の仕方によって限りない意味が見出されるものであると思われる。

以上のような意味を持つ本書であるが、内容的に全く問題がないわけでもない。すでに述べたように本書は、編者を中心とした数名のメンバーによる輪読会の記録の整理である。どのような内容の輪読会であったのか筆者には知るよしもないが、全体を通して講読すると典籍によって随分と現代語訳に違いがあることが感じられる。非常にこなれて読みやすい訳のものもあれば、現代日本語としてほとんど理解不可能ではないかと思わ

れるような訳も存在する。また、せっかく語注を施しながら、どのような意味での注であるのか意味不明のものも少なからずある。一例を挙げてみよう。巻第十一「中論序」の末後の文の「不滞於有。則断滅見息。不存於有。則常等氷消。寂此諸辺。故名曰中」の中の「常等氷消」を「常住とか正等とかにかたよった見解」（三一五ページ）と訳している。日本語としては意味不明なので注が付されている（三一六ページ、注九）。しかし、この注は般若波羅蜜を「無上正真道」と訳した場合に「正」は「等」の意味であるという内容のものであり、本文にあるような「かたよった見解」を表すものではない。確かにこの部分は対句の構造からいって多少読みにくいが、「断滅見息」と「常等氷消」とが対応関係にあるので、断滅見に対する常住見と理解すべきであろう。そう解すれば次ぎの文「寂此諸辺（こうしたさまざまな偏りをからりと解消するから）」に無理なく繋がっていくように思われる。また同一用語についての現代語訳の混乱も少なからず見受けられる。一例として巻第十一の「中論序」（僧叡）と同「十二門論序」（同）を挙げることができる。ちなみに「中論序」では「泯二際」を「二つの真理の区別をなくす」と訳して、「二際」を「二つの真理」と解している。これに対して「十二門論序」では「喪我於二際」を「主体を（有無）二つの際において考えることなど忘れてしまう」と訳して「有無二つの際」と解した上で、注に先の「中論序」の該当個所を挙げている。これはどのように見ても不統一の感を免れず、前者を訂正すべきである。

また、輪読会のメンバーの中には仏教学の専門家がいなかったのであろうか、単純な間違いも見受けられる。例えば、巻第十一「比丘尼戒本所出本末序」の冒頭で「拘夷国」に対して「クシナガラ」とルビを付し非常に丁寧な注を施している（三三八ページ、注二）。ところが、本文を丁寧に読んでいくと、この国の重要な寺が「仏図舌弥」という人によって統率されているという記述がある。この「仏図舌弥」は、次ぎの「比丘大戒序」（道安）のなかには「丘慈国仏陀舌弥」（三四二ページ）、その次ぎの「大比丘二百六十戒三部合異序」（竺曇無蘭）の中には「亀茲仏陀舌弥」（三五二ページ）「丘慈高徳沙門仏図舌弥」という一連の記述があることによって「亀茲国」（クッチャ）の人であることが分かる。従って「拘夷国」は、クシナガラではなくてクッチャでなければならないのである。確かにクッチャを「拘夷国」と音写する用例があまり多くないことは事実である。しかし、釈尊入滅の地であるクシナガラでこの時代に仏教が盛んだったといったことも全く聞いたことがない。

同様の例は筆者が気付いただけでも少なからずある。多少揚げ足取りのような気もするが二三紹介しておきたい。経序の文中で人間の分別を表す場合に「名数」という表現を用いる場合がしばしばある。この「数」という用語に対して本書は一貫して「ことわり」とルビを付している。確かに漢和辞典などにはこのような用例が載せられていることは事実であるが、果たしてそのような意味であろうか。「数」を「ことわり」と理解する態度は一貫しており、例えば巻第十一「抄成実論序」の冒頭

の「尋夫数論之為作也」の「数論」まで「ことわりに対する論」と現代語訳している。しかしこれは明らかに誤りで、ここでの「数論」という言葉は「アビダルマ（阿毘曇）」といった意味なのである。「抄成実論序」もその後に言うように、アビダルマ仏教では諸法を細かく分析して真理を探究しようとした。この場合、諸法とは、内容的には言葉によって他と区別された物事という意味であり、存在的には一つ二つと数えられるところの個々の事物のことである。このような意味で前者を「名」、後者を「数」と言ったのであろう。従って「数」はことわりというよりは、ことわりによって切り取られた個々の事物を把握することといった内容を持っているのである。

このように仏教学の視点から本書を見た場合に多少の問題がないわけでもない。この点は、編者自ら「不明のまま残したところもきわめて多いし、誤読や誤解も少なくないであろう」（六ページ）と述べられるとおりである。しかし、その事によって本書の価値が大幅に低下するといったことでは毛頭無い。一般に、こうした質の高い文章に対する訳注を公にすることは、どちらかといえばためらわれがちである。何故なら、質の高い文章であればあるほど訳注者の理解の至らない点が必ずあるはずであり、それを活字化することによって、後に必ず誤釈や誤訳といった不備を指摘されるに至るからである。このような理由によって公刊される訳注書は、自ら墓穴を掘ることのない可もなく不可もないものとなりがちなのである。このような背景の中で本書が公刊されたことは実に大きな意義がある。本書は決して完璧なものとは言えないかもしれないが、本書によって『出三蔵記集』の経序全体を手近に通読することができるようになった。これまでは通読するために非常な困難を伴ったので、『出三蔵記集』などを基盤として初期中国仏教を研究できるのは一握りの大家に限られていた。このような状況の中で、ひとまず経序を理解していくための手引きができたわけである。本書を基盤として、更に深く内容を把握していくことができるであろう。それ故、本書はこれからの初期中国仏教の研究に貢献するところがきわめて大きいのである。

〔一九九七年二月二八日発行　平楽寺書店　B5版　Ⅷ＋三六二＋索引一五ページ　定価九〇〇〇円（税別）〕
ISBN4-8313-1033-6　C3015